

# コネクション THE CONNECTION

Bringing faculty and students together since 1998

## モンテグ & アソシエート CEO: Mr. Jeffrey Montague

-メインキャンパス-

社長: Yuri Kurashima

副社長: Kamille Edwards

経理部: Chair: Amy Gatter

Associates: Jeffrey Stumpf

ファンドレイズ部: Chair: Stephanie Schafer

Associates: Elisabeth Bender, Lauren Johnson, Thomas McCullough, Megan Sheaffer, Timothy Thiess, Nicholas Ventrola

マーケティング部: Chair: Ericka Bitzer

Associates: Adam Tomas, Danielle Coleman, Fakhri Methamem

広報部: Chair: Stepheny Booker

Associates: Philip Canosa, Stephanie Hanlin, Erena Joseph, Jennifer Scattene, Kathy Tsai

ボランティア/CPR部: Chair: Kristen Cortez

Associates: Matt Aukett, Nikola Millen, Kelly Yemm

会議/会員部: Chair: Sharanya Pattabi

Associates: Nathan Gullo, Ami Hoshino, Christina Luciani

プロジェクト部: Chair: Kamille Edwards

Associates: Mark Grossman, Alison Kreitz, Allison McDermott, Kyle Parks, Amber Thomas

-センターシティキャンパス-

社長: Lucy Foerster

副社長: Joshua Mann

経理部: Chair: Nicole Smith

Associates: Kevin Daniels

ファンドレイズ部: Chair: Rachel Sultzor

Associates: Dan Brady, Michael Willey, Kenneth Krantzler, Scott Pristas, Russell Zimmerlin

マーケティング部: Chair: Joe Kaer

Associates: Adam Preston, Bridget Clark, Daniel McNeil

広報部: Chair: Michael Lembo

Associates: Nick Kraynak, Randall Cobb, Katharine Marshall, Gregory Parchment

ボランティア/CPR部: Chair: Kristin LoBiondo

Associates: Anthony Nelson, Justin Scariato, Shawn McConaghy

会議/会員部: Chair: David Madochick

Associates: Denise Bailey, Kevin Rafferty, Derik Comalli

プロジェクト部: Chair: Elaine Kourkoumelis

Associates: Andy Carl, Robert Stimmel, Matthew Marmorato, Daniel Fratantoni

## 社長からのメッセージ

フィラデルフィアも長い冬に終わりをつげ、桜のつばみもふくらみはじめ、春がもうそこまで来ています。フィラデルフィアでの3度目の桜の季節を迎え、いよいよ最後の学期となり観光ビジネス学部最後の、そして最高のプログラムであるシニアセミナーも半分を終わろうとしています。テンプル大学観光ビジネス学部の大きな顔であるこのセミナーについて私、倉島侑里がお話させていただきたいと思います。

このセミナーでは観光ビジネス学部副学部長ジェフリーモンテグをCEO、代表取締役とし、メインキャンパス・センターシティキャンパスの2つのセミナーを会社として成立させています。そこに7つの部署を設け、部長を中心にプロジェクト、学部広報作成、資金調達イベントの企画、制作をし、会社を運営していきます。各40名のクラスの生徒が社員として実力を発揮し、メインキャンパス、センターシティキャンパスがそれぞれの大きなイベントに向かって準備しています。

私がCEOにシニアセミナー、日本人初のプレジデントのポジションを任されて約1ヶ月が経とうとしています。CEOが決めたポジションにはそれぞれ大きな、そして深い意味があり、個々の足りない部分や特色を考慮した上での、CEOの的確な判断で編成された組織が会社を動かしていると言えます。まれに仕事が出来ず解雇されるという場面もありますが、個々の様々なトラブルの対処の仕方、それに対する各部長の反応などがすべて評価の対象とされています。今回、メインキャンパスでCEOの掲げたメインテーマは国際性だと考えています。それゆえに日本人である私がプレジデントに選ばれたわけです。アメリカの大学でアメリカ人以外ましてアジア人が、率先して40名弱のセミナーを動かしていく、なんと大それたことでしょうか。しかし、CEOが何を考えて私をプレジデントとして選んだかというのは、インターナショナルなスピリット（特にアジアスピリット）をビジネス基盤として組織を運営していくと言うことが、私の経験ももちろんですが、ほかの生徒の貴重な経験になるからだとということなのです。アジア人のソフトなフィーリングを表に出した会社の組織作りにつとめつつ、いよいよ間近にせまったネットワークセミナーに向け社員一同、心をひとつにして頑張っております。日本に外資と言われる海外資本の会社が増え、様々な国の人が日本で働き、そして日本に沢山の外国人観光客が訪れ、国際化が進み、国際結婚も増えている昨今、将来を見据えたこのセミナーに参加できたことは、どこへ出て行っても通じる経験となることだと確信しています。私事ではありますが、3年間テンプル大学テニスチームの一員として、NO1プレーヤーとして、そしてキャプテンとして、大学の誇りを胸に最高の環境でプレーさせていただけたことを大変感謝しております。これからもこの経験を生かし常にテンプル大学の卒業生と言う誇りをもって、社会で活躍していきたいと思っております。

テンプル大学 メインキャンパス  
観光ビジネス学部スポーツマネジメント学科 4年  
テンプル大学 女子テニスチーム キャプテン  
倉島 侑里

## 目次

ツーリズムニュース.....	2-3
ホスピタリティーニュース.....	3-4
スポーツニュース.....	4

## ツーリズム

### 「日本の冒険」

ジョー ケアー

テンプル大学の観光ビジネス学科を専攻する学生なら分かるだろうが、この専攻はコネクションがものをいう。実際にこのコネクションが役立つ事があったのでお話ししよう。テンプルに入学してから仲良くなった日本人とのことだ。ある日、彼から夏にテンプルジャパンで授業を取ることを聞いた。私はずっと日本に行きたかったのだから、彼が日本にいる間に遊びに行くと軽く冗談を交えて約束した。誰しも口だけの約束をすることがあるだろう。しかし数ヶ月後、よく考えてみたときに、今なら日本を訪れることの出来る場所や友人がいるのだ、と気づいた。そして深く考えることなく日本行きのチケットを予約していた。フィラデルフィアから飛行機に乗って13時間後、成田国際空港にようやくたどり着いた。そこからさらに彼のアパートがある東京豊島区まで車で2時間。ようやく彼の小さなアパートに着き数時間落ち着いた後、アパートから歩いてすぐの小さな牛丼屋で初めて日本の味を体験した。言っとくが日本の料理は絶品である。日本のラーメン屋で食べるラーメンは今まで食べたラーメンの中で一番おいしい。牛丼もおいしかったし、魚もとても新鮮だ。食べ物だけでなく、人々もとてもフレンドリーで感じがいい。そんな日本で生涯忘れることのできないすごく良い思い出が二つできた。ひとつは友達のおばあさんの家で、本格的な日本の習慣を体験することが出来たことだ。彼女はとても優しく、私に日本の習慣を沢山教えてくれた。例えば、伝統的なお茶の飲み方(茶道)や餃子、味噌汁の作り方だ。特に茶道が私の心に残っている。なぜならその際に使った手作りのお

茶碗をおばあさんが後で僕に記念に、とってくれたからだ。何度かドアのフレームに頭をぶつけたのは別として、おばあさんの暖かいもてなしには感謝しきれない。

もうひとつのいい思い出は山で30人もの日本人の学生の中で一晩過ごしたことだ。友達の高校の同窓会だった。私一人が30人ものなかで英語のみしか話せないということは、私にとってとても貴重な経験だった。彼らと限られた会話しかできなくても、人生の中でも一、二を争うほど楽しむことが出来たのだ、きっと一生思い出に残るだろう。もし、これを読んでいる人で旅行をしようと考えている人がいたなら、学生のうちにしておいた方がいい。この専攻を通して、どんなコネクションを手に入れるか分からないからだ。

### 「手荷物持ち込みの便利さ」

ステファニー シェイファー

幼いころ、家族でイエローストーン国立公園を訪れにモンタナ州に行ったことがある。空港に着きしばらく待たされ、やっと外に出られたと思ったらすぐ近くにあるウォルマートに行ったことを覚えている。そこで父のスーツケースがない事に気づいた。行方不明になってしまったのだ。

交通局の統計によると、2006年8月には1日平均14089個もの荷物がアメリカ全土の空港で無くなっている。なんて不便なのだろう。9・11のテロ以降セキュリティーの規定が厳しくなり、手荷物を機内に持ち込みする事すら難しくなった。もちろん規定が厳しくなるのは理解できるし、少しも疑問に思わない。しかしうまく荷物を機内に持ち込めれば、荷物が紛失することを心配せずに旅を楽しめるのだ。それには簡単な秘訣がある。

秘訣1:基本はダッフルバック。

機内にある棚に入れられる荷物は横 22 インチ、縦 14 インチ、高さ 9 インチ。それがどれだけ大きいのか想像しにくいだろうが、ジムで使うダッフルバックが理想的な大きさである。そして大抵ダッフルバックには横にポケットが付いている。もし、きちんと詰められれば旅行に必要なものを全て入れられることができるのだ。

秘訣2:大事なものだけ。

例えばどこか暖かいところに行くなら、まず短パンを 2 枚、Tシャツを 5 枚、よそ行きのシャツ、パンツやスカートを何枚か、水着、下着、そしてサンダルを。もしフィラデルフィア発なら目的地の方が暖かいだろうから厚着になってしまうだろうけれど、大抵どこでも夜は寒いので出発時にロング Tシャツ、トレーナーにはき慣れたジーンズでいれば、旅行している間それらを着まわせる。必要な物だけを考えて持っていくのだ。

秘訣3:飛行場やホテルにあるお店を有効に活用。

セキュリティが厳しくなって以来、歯磨き粉、ローション、日焼け止めクリーム、シャンプーやコンディショナーといった液状のものは機内持ち込み禁止になってしまった。だが持ち込めないのならば目的地で普段のサイズより小さい旅行用を購入し、旅行中に使い、帰りには捨ててくればいいのだ。そのために少し余分に旅費を持つてくることをお勧めする。荷物を機内に持ち込むだけで荷物が紛失することもなくなる。それだけではなく荷物が出てくるまで待つこともないし、もし国際線でもすぐに税関に行けるので便利だ。旅行中に不愉快な気分を味わう機会が減り、快適な旅を楽しめる。手荷物の機内持ち込みを促進する事は旅行客だけでなくホテルや旅行代理店の利益にもなる。そしてなによりも荷物を紛失されて不満を抱く人々も少なくなるだろう。

## ホスピタリティー

### 「Fado、サッカーをアイルランドの伝統とともに」

ファクリー マターメン

私がフィラデルフィアのセンターシティに住み始めてもう 7 年になる。他の国に住んでみて気づいた事といえばフィラデルフィアのような町で、自国で当たり前にしてきたような事をするのは自分へのご褒美に値するくらい時には難しいという事だ。例えば、一日中友達とサッカーの試合を観る事。このフィラデルフィアという町ではみんなフットボールに夢中だ。誰もがフィラデルフィア・イーグルスというプロフットボールチームに熱中し、シーズンともなればイーグルスマニアの中心地になる。私にとってこのお祭り騒ぎは楽しいが、同時にサッカー観戦の場を探すのが困難になってしまっているように思う。

私のサッカーへの情熱はイーグルスファンのそれに劣ることなく強く、この街で観戦できる場所はないかと探したところ 15 t h と Locust の角に Fado(ファド)という素晴らしいアイルリッシュパブがあった。2002 年の夏に見つけて以来いまずっと通い続けているこのパブでは、アイルリッシュの伝統とサッカーを共に味わうことができる。スタッフはフレンドリーで、お店はとてもインターナショナルな雰囲気をもし出している。素晴らしいエンターテイメントだけでなく、料理もすごくおいしい。この場所はきっとパーティー好きの人にはたまらないだろう。去年の夏、ワールドカップが行われていた時期はずっと Fado でサッカー観戦をしていたが、なんとも言えない気分だった。

ここのおかげで、新しい出会いにめぐまれ、友達もたくさん作ることができた。Fado は国際性を提供することによって、フィラデルフィアをアメリカの中でも多様な文化の存在する町にす

るために貢献している。そしてそれを求める客  
たちを満足させているのだ。

## スポーツ

### 「留学生という生活」

シヤラーニヤ パタービ

私は、インドのチェンナイ出身です。私はフィラデルフィアでこの2年間過ごしてきました。現在、テンプル大学ではスポーツマネジメント学科を専攻しています。自国と家族から離れるのはとても辛いことでしたが、テンプルで得てきた知識や経験はそれ以上のものでした。留学生としての生活は今のところ、刺激的な毎日を送っています。アメリカという新しい国を見ることが出来て、様々な国からの人と出会い、文化を学べるいい機会なので、初めてアメリカに来た時はカルチャーショックを受けました。食べ物から、服、自由、価値、ライフスタイル、そしてコミュニケーションのとり方まで全て、アメリカとインドは全く異なっていました。しかし、ここでのライフスタイルに慣れてくると、だんだんこの国でのことや人々の生活のことを理解するようになってきました。

留学生でありながらアスリートであるという経験は私にはとても新鮮なものでした。私は女子テニスチームの一員で他に7人のメンバーの中5つのアメリカ以外の国からの留学生がいます。毎日が新しい発見であり、ほかの国の事について、教えられる事が必ずあります。新しい言葉、新しい食べ物の味、たくさんの文化に触れ合うことで、たとえ違う環境で育ち、違う文化を持ち、違う言語を話したとしても、心の深いところでは、みな同じなんだと気づかされました。みんなここにいるのは何か使命があ

るから、そして似たような目標があるからです。私たちみんなは、家族のようなものなのです。ここで出会った人たちは最高の人たちです。教授、クラスメイト、チームメイト、コーチやテンプル大学のスタッフ、みんな私を一員として迎え入れてくれ、そして歓迎してくれました。そのおかげでアメリカ生活で慣れていくことは、とてもスムーズに行くことができました。

そして、今この国とここで出会った素晴らしい人たちにお別れを言わなくてはいけない時が来ました。あと2ヶ月で、インドに帰りインターンをやり終え、テンプル大学の立派な学生として卒業します。アメリカでの2年間半は、私に自信をあたえてくれ、リーダーシップを身につけさせてくれました。そして何より人間性を向上させてくれました。テンプル大学とフィラデルフィアは私にとって第2の故郷になりました。



メインキャンパス



センターシティキャンパス